AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2015.12) 平成26年度:49-50.

ギアチェンジ告知後の肝細胞がん患者の思い

都築 正也、越田 真波、鈴木 亜美、黒田 初穂、柴田 千恵子

ギアチェンジ告知後の肝細胞がん患者の思い

旭川医科大学病院　6階西ナースステーション　○都築　正也、越田　真波、鈴木　亜美
黒田　初穂、柴田千恵子
キーワード：肝細胞癌、ギアチェンジ、ニーズ

1. 研究目的

ギアチェンジの告知を受けた肝細胞がん患者（HCC＝Hepatocellular carcinoma, 以下 HCC 患者）の思いやニーズを明らかにする。

2. 研究方法

1) 研究デザイン：質的記述的研究デザイン
2) 研究期間：平成25年9月～11月
3) 対象者：医師からギアチェンジの告知をされており、自身の危機的状況を理解しているHCC患者4名。
4) 分析方法：半構成的面接法で得られたデータから逐語録を作成し、コード化・カテゴリー化した。
5) 用語の定義：ギアチェンジとは、「積極的な治療を中止して緩和ケアを中心とした終末期医療に転換すること」[1] とする。

3. 倫理的配慮

研究の趣旨、プライバシーの保護、不参加及び中断による不利益を受けないことを書面及び口頭で説明し同意を得た。なお、本研究は研究者の所属する施設の倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 結果

ギアチェンジ期にある HCC 患者の抱える思いとして、245 のコードが抽出され 41 のサブカテゴリーと 8 のカテゴリーを生成した。以下、カテゴリーを【　】、サブカテゴリーを＜　＞、コードを「　」で示す。

HCC 患者は常に＜急変への不安＞があり、【がんと共に生きる事での不安】を持って生活していた。また、＜仕事の引き際＞を考えており、【がんになった事での葛藤】を抱えていた。他方、「がんを十分治療した」など、＜自分の頑張りに満足している＞という【治療を継続して得られた自己効力感】を持っており、それが＜疾患経過に対する予測・覚悟がある＞というような【先にある死を受け止める】ことに繋がっていた。また、「体がしんどくなるまでは大丈夫だと思う」など、＜体調に合わせて生きがいを継続したい＞と【自分らしい生き方】について考えていた。他方、「泣いている暇があるなら、もう少し前向きに自分の楽しむことを考えていきたい」と、＜残りの人生を前向きに捉えようとする＞気持ちがあり、【死を意識した生き方】を考えていた。また、患者は＜同疾患患者との関わり＞や＜家族や周囲の人からのサポート＞を受け、【家族や周囲の人との絆】が心の支えになっていた。さらに、「看護師はよく話も聞いてくれるし話してくれる」など＜医療者が話を聞いてくれることへの感謝＞などの【医療者に対する思い】があった。

5. 考察

ギアチェンジ期にある HCC 患者は、現状を受け止め、人生を前向きに考えながらも、不安や葛藤を抱えていた。看護師には、本人と家族が急変などに対応できるよう支援することが必要とされる。さらに、患者がこれまでの治療の選択に納得ができ、またこれからの生き方を前向きに捉えられるよう、本人の不安や葛藤を受け止め、傾聴する姿勢を継続することが必要であると考える。

6 結論

1) ギアチェンジ期にある HCC 患者は、急変への不安やがんになった事での葛藤を抱えながら、治療を継続して得られた自己効力感を糧に、先にある死を受け止め自分らしく前向きな生き方をしたいという思いを持っていた。
2) 家族や看護師の存在は、患者の心の支えとなっていた。
3) 看護師は、患者の不安や葛藤を受け止め、傾聴する姿勢を持つことが重要である。

7. 引用・参考文献

1) 松尾直樹：ギアチェンジ, がん治療レクチャー2 (3), 641-645, 2011.

ギアチェンジ告知後の肝細胞がん患者の思い

旭川医科大学病院　都築正也　越田真波　黒田初穂　鈴木亜美　柴田千恵子

はじめに

A病棟では、長期に渡り治療を行ってきた肝細胞癌患者は、ギアチェンジの告知を受けた際に「大丈夫」「死について受け止めることができている」と話すことが多い。しかし、私たちはギアチェンジの告知を受けた患者への関わりに困難さを感じており、患者の思いやニーズを十分に引き出せていないのではと考えることがある。そこで、本研究では、ギアチェンジ告知後の肝細胞癌患者を対象として、告知を受けた患者の思いやニーズを明らかにし、今後の看護実践を検討する。

研究方法

・研究デザイン：質的記述的研究デザイン
・研究期間：平成25年9月～11月
・対象者：医師からギアチェンジの告知をされており、自身の危機的状況を理解している肝細胞がん患者4名。
・分析方法：半構成的面接法で得られたデータから逐語録を作成し、コード化・カテゴリー化した。
・用語の定義：ギアチェンジとは、「積極的な治療を中止して緩和ケアを中心とした終末期医療に転換すること」[1)]とする。

倫理的配慮

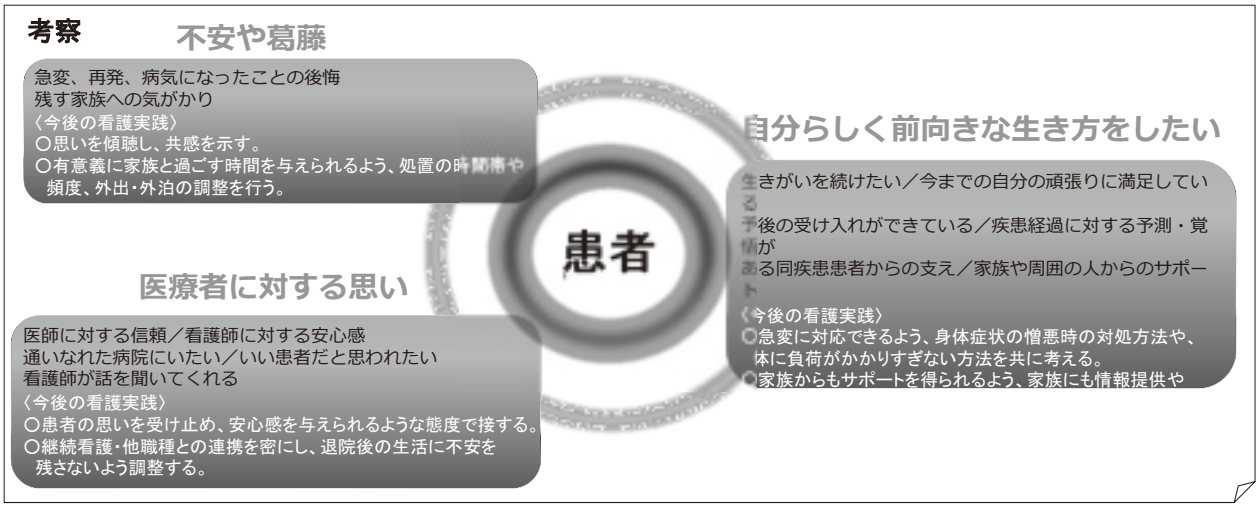
・研究の趣旨、プライバシーの保護、不参加及び中断による不利益を受けないことを書面及び口頭で説明し同意を得た。なお、本研究は研究者の所属する施設の倫理委員会の承認を得て実施した。

結果

カテゴリー	サブカテゴリー
【癌と共に生きることでの不安】	＜悪化していく症状の不安＞ ＜急変への不安＞ ＜再発への不安＞ ＜疾患経過の中で受ける不安＞ ＜今後の治療に対する思い＞ ＜病気になったことへの後悔と葛藤＞ ＜治療した効果を実感している＞
【癌になったことでの葛藤】	＜癌になったことへの後悔＞ ＜できるならば治療したいという思い＞ ＜仕事の引き際＞ ＜癌となってあきらめたこと＞
【死を意識して生き方を考える】	＜予後を知りたいという思い＞ ＜残された期間が短いことを受け入れている＞ ＜残りの人生を前向きに捉えている＞ ＜最期の時の迎え方＞ ＜死を迎えるための準備＞
【先にある死を受け止める】	＜病状進行を自覚している＞ ＜疾患経過に対する予測・覚悟がある＞

カテゴリー	サブカテゴリー
【治療を継続して得られた自己効力感】	＜少しでも永く生きることができた喜び＞ ＜治療した効果を実感している＞ ＜今までの自分の頑張りに満足している＞
【家族や周囲の人との絆】	＜家族の生活が保障されている安心感＞ ＜親として今できること＞ ＜家族への申し訳なさ＞ ＜家族への気がかり＞ ＜同疾患患者との関わり＞ ＜家族や周囲の人からのサポート＞
【自分らしい生き方】	＜生きがいの継続が困難となったことに対する思い＞ ＜今後の希望＞ ＜今の日常を維持したい＞ ＜仕事に対する熱い思い＞ ＜体調に合わせて生きがいを継続したい＞
【医療者に対する思い】	＜通い慣れた病院にいたいという思い＞ ＜医師への信頼＞ ＜看護師に対する安心感＞ ＜看護師の評価＞ ＜医療者の対応で印象に残っていること＞ ＜ケアに対する満足感＞ ＜医療者が話を聞いてくれる＞ ＜医療者の対応で改善してほしいこと＞ ＜医療者に対する感謝＞ ＜いい患者だと思われたい＞

考察



結論

1)ギアチェンジ期にある 肝細胞がん患者は、急変への不安やがんになった事での葛藤を抱えながら、治療を継続して得られた自己効力感を糧に、先にある死を受け止め自分らしく前向きな生き方をしたいという思いを持っていた。
2) 家族や看護師の存在は、患者の心の支えとなっていた。
3)看護師は、患者の不安や葛藤を受け止め、傾聴する姿勢を持つことが重要である。

引用・参考文献　1) 松尾直樹：ギアチェンジ，がん治療レクチャー2（3），641-645，2011